俺達のロカビリーナイト

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺達のロカビリーナイト

【Ｎコード】
Ｎ８０２２Ａ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
ふらりと故郷に帰ってきた一人の男。彼はもう寂れてしまっている街中のさらに寂れた喫茶店に入った。その中で昔の日々を思い出すのだった。チェッカーズシリーズ第十弾です。今回は初期のシングルの曲です。

第一章

カビリーナイト　　俺達のロ

この街に戻ってきたのは何年ぶりなんだろうか。俺は道を歩きながらふと思った。

「あの時はあいつ等がいたな」

もう気の遠くなるような昔だ。といってもこの街を出てからまだ数年しか経っちゃいない。それでも俺にとっては気の遠くなる程の昔だった。

俺がこの街を出たのは大きくなる為だった。夢があった。けれどまだその夢を掴めちゃいなかった。

半端なままだった。生きていけることは生きていけるがそれだけだった。俺はそんなの望んじゃいなかった。大きくなれるか、野垂れ死にするか。二つに一つしかなかった。けれどどちらにもなれなくて今こうして飛び出た筈の街に戻ってきた。何処までも半端なままだった。

数年の間に街は変わった様に見えた。やけに寂れている。風が吹いているがそれがやけに寒い。それだけはあの頃と変わりはしなかった。

「あいつ等がいないだけか」

俺は呟いた。あの時一緒だった仲間達はもうこの街には一人もいない。俺が戻ってきたことですら知っている奴はいないだろう。この街で生まれ育ったってのに今の俺にとってこの街は何もない街だった。

黒い革ジャンから煙草を取り出す。そしてそれを口に咥えて火を点ける。煙をふかしてもあるのは只空しさだけだった。本当に何もなかった。

「あそこに行くか」

俺はふとこう思った。昔の馴染みの店だ。あそこに行けば気分も変わるかも知れないと思った。
冷たいアスファルトにコンクリートの橋。その上には電車が通っている。トンネルの壁には俺と仲間達がスプレーで書いた落書きがまだ残っていた。
「あの落書きもまだあるかな」
俺はその懐かしい落書きを見てふと思った。すると耳に何かが聞こえてきたように思えてきた。誰かが指を鳴らす音だった。それはやけに俺の耳に訴えてきた。不思議なものだった。

パチン、パチン、パチン

その指を鳴らす音を聞きながら俺はその店に向かった。一瞬まだ開いているかと思ったが大丈夫だった。かなり寂れてはいるがまだやっていた。
中に入る。誰もいなかった。俺が通っていた時よりもまだ寂れていた。やっているのが不思議な位だった。
「いらっしゃい」
バイトだろうか。高校生位の赤い髪のガキがカウンターにいた。店の人間もどうやらその娘だけのようだった。
「マスターは？」
俺はそのバイトに尋ねた。
「今病気で。入院してるんです」
「病気か」
「ええ。ちょっと」
どうもあまりよくない病気らしい。それはこの娘の様子でわかった。
「もう少ししたら退院すると思いますけど」
「そうか、ならいいんだけれどな」
俺はその言葉を信じるふりをした。あくまでふりだ。実際にマス

ターがどういった状況か、今のこの娘の様子でわかった。俺はそれに応えながらカウンターの席に座った。
「コーヒーくれないか。ブラックでな」
「わかりました」
赤い髪の娘はそれに頷くと暗い店の中でコーヒーを入れはじめた。そして俺の前にブラックを出してくれた。
飲んでみる。意外と美味かった。あのマスターの味そのままだった。
「美味いね、これ」
「有り難うございます」
俺に褒められたのが嬉しかったらしい。女の子はにこやかに笑って応えてきた。
「マスターに教えてもらったんですよ、色々」
「へえ」
「コーヒーの入れ方もお菓子の作り方も。それでお店を任されてるんですけれど」
「どうだい、調子は」
「よくないです。何かマスター自身に人気があったお店らしくて」
「だろうね」
俺はその言葉に頷いた。ここのマスターはいい人だった。俺みたいな札付きの不良が店に来ても温かい顔で迎えてくれた程だった。ここに来たのはそのマスターに会いにきたのもその理由の一つだった。
だがそのマスターはいなかった。それだけでこの店に来た理由が半分意味がなくなったがそれでもそのマスターのコーヒーは飲めた。それだけでも満足することにした。
「ここのマスターのコーヒーはいいでしょ」
「ええ。私もここで飲んでバイトはじめたんです」
女の子はまた応えた。
「あんまり美味しかったから。それで今は留守まで預かって。けれ

ど」
「大丈夫だよ」
これは本音だった。
「これだけのコーヒーが出せるんだから。店は潰れないよ」
「そうでしょうか」
「安心していいよ。この店の売りはマスターだけじゃないから」
俺は言った。
「このコーヒーだってそうなんだ。それが出せたら心配はいらないさ」
「わかりました。それじゃ」
「もう一杯おかわり」
「はい」
俺はもう一杯注文した。女の子がそれを受けてコーヒーを作っている間に店の中を見回した。寂れてはいるがあの時のままだった。そしてカウンターの奥を見た。俺はその店の中であるものを探していた。
それはあった。一枚の写真だった。マスターはまだとって置いてくれていた。
「お待たせしました」
女の子はお代わりのコーヒーを出してくれた。俺はその娘にコーヒーの他にもう一つ注文することにした。
「あの」
「はい」
「そこにある写真とってくれないかな」
「写真？」
「ほら、そこにあるよね」
俺は写真の方を指差して言った。
「えっと」
「そこにある写真。悪いけどこっちに持ってきて」
「わかりました。それじゃ」

女の子は素直にその写真を持って来てくれた。見ればうっすらと埃がかかっていた。それを見て本当にもう昔のことなんだと思わずにいられなかった。

指でその埃を拭う。するとそこにはあの時の俺がいた。何かやけに上機嫌に笑っていた。

俺だけじゃなかった。仲間達もいた。皆笑っている。そしてあいつも。そこには俺の青春があった。

コーヒーを一口飲んだ後煙草の火を点ける。不意に俺の世界があの中に戻っていった。

あの時俺はしがない不良だった。いつもつっぱっていて何も面白いことはなかった。

日がな一日学校でも街でもブラブラしていた。先公も俺を見放していたし誰も何も言わなかった。俺は自分が何をしたいのかもわからねえで一日荒れて暮らしていた。そんな時だった。

第二章

俺はたまたまこの店に入った。金が少しあったので入っただけだった。そしてそこで適当に時間を潰すことにした。
その時はカウンターじゃなくて四人の席に座った。何かだべって楽したかったからだ。今みたいにこのコーヒーを飲んで煙草をふかしていると背中の方から話し声が聞こえてきた。
「それでドラムだけどな」
何か男の声だった。
「誰かいいのいねえかな」
「あいつはどうだ？」
別の奴の声がした。これも男だった。
「あいつはどうも駄目らしい」
「何でだよ」
「今何か二つのバンドが解散して新しいチーム組むってよ。それでそこに入るらしいんだ」
「何だよ、それ」
何か一方がやけに怒ってるのがわかった。
「こっちが先にあいつ誘ったんだぜ。それでこれかよ」
「まあ仕方ないさ。向こうはヴォーカルとギターが洒落にならない位凄いしな」
「あの二人かよ」
「おまけに何でもベースとサックスにすげえの入れたらしいぜ。それに加えてヴォーカルがまた二人」
「何かとんでもねえグループになりそうだな、あそこは」
「あそこと比べたら俺達はやっぱり素人だしな。こっちはこっちでやろうぜ」
「それしかないか」
「ああ、それでな」

何かバンドの話をしてるらしい。そういえば学校でもちょっと話題になってたのを思い出した。
「とりあえずドラムはもう誰でもいいぜ」
「誰でもいいのかよ」
「やる気があるならな。後はどうにでもなる」
「御前がそこまで言うのなら仕方ねえな。それでいくか」
「ああ」
それでこの日は終わりだった。だが次にここに来た時も全く同じだった。やっぱり後ろで色々と話をしていた。
「で、見つかったのかよ」
「駄目だ」
また音楽の話をしていた。
「誰でもいいんだけどな」
「それでもいいねえのかよ」
「ああ。どっかに誰かいねえのかな」
俺はそれを聞いていてふと思った。どうせ暇な身だ。
「おい」
俺は後ろを振り向いて話をしている連中に声をかけた。見れば二人いた。どっちも俺と同じワルだった。リーゼントとパーマにして服はヨーランにボンタンだった。やけに高いカラーが目立っていた。
「ドラム探してるのかよ」
「ああ。御前誰だ？」
そのうちのパーマの奴が声をかけてきた。
「ここの高校のモンだけどよ。そっちこそ見ない顔だな」
「ここの奴だったのかよ」
パーマはそれを聞いて言った。
「俺は隣の街のモンだ。こいつもな」
「何だ、隣だったのか」
「ああ。ここの店のコーヒーが美味いって聞いてな。それで来てたんだ」

「そうだったのか」
「それでドラムのことだけどよ」
そいつは俺に声をかけてきた。
「探してるのは本当だ。誰でもいい」
「誰でもか」
「ああ。何ならやるかい？もう楽器はあるぜ」
「面白そうだな」
俺はそれに乗ることにした。
「じゃあ入れてくれよ。そのドラムでな」
「わかった。それじゃあ決まりだな」
「ああ。じゃあすぐに行くか」
「おい、もうかよ」
あいつはあの時俺のその言葉を聞いて苦笑いを浮かべた。
「気が早えなあ、おい」
「何かすぐにやりたくてな」
「わかった、じゃあ行くか」
あいつは頷いた。これで全ては決まった。
それから俺達はこいつと一緒になった。学校は違ってもいる場所は同じになった。俺達はバンドを組みそこで同じ時間を過ごすようになった。
バンドに金をつぎ込むようにもなった。しがない不良で金もそんなになかったがそれでもよかった。バンドをやってりゃそれで満足だった。何時かチャンスを掴もうとさえ思っていた。
「あのバンドは凄かったな」
「ああ」
俺達は最近まで街で誰もが知っていたあのバンドについてもよく話した。
「あれ位にならねえとな」
「なれっかな、俺達に」
俺はドラムを軽く叩きながら呟いた。

「あんなドラム他にいねえぜ。お笑いもできっしよ」
「ヴォーカルもな。ありゃ凄げえぜ」
「けどなりてえな」
「ああ。そして何時かは」
「俺達も東京へか」
「そうだ。絶対に行くぜ」
「皆一緒にな」
「勿論だ。その為に俺達はバンドをやってるんだからな」
あいつは皆で東京に行くつもりだった。高校を卒業しても働きながらやっていた。働きながらだったが辛くなかった。それも全部あいつがいたからだ。俺達はきついのを笑い飛ばしながらやっていた。あの時までは。
「おい、それマジか」
俺はその話を親から聞いた。お袋が電話があったって伝えてくれた。丁度仕事から帰ってすぐだった。またすぐに作曲かドラムの練習でもしようかと考えていた矢先だった。
「本当のことらしいよ」
お袋の言葉の調子からそれを信じずにはいられなかった。けれど俺はそんなことは信じたくはなかった。その時は絶対に信じたくはなかった。
「嘘だ、嘘に決まってらあ」
「けれど本当のことなんだよ」
お袋のせめてもの心遣いだったんだろう。慰めるように言ってくれた。
「だから、ね」
「・・・・・・今何処にいるんだよ、あいつ」
俺は俯きながらお袋に尋ねた。
「えっ」
「電話で教えてくれたんだろう？」
「そうだけれど」

「教えてくれ。あいつは何処なんだ」
俺はお袋に尋ねた。
「何処にいるんだよ、教えてくれよ」
「いいんだね」
お袋は俺を見ながらこう言った。
「言っても。何見てもいいんだね」
「構わねえよ」
俺もここまで言ったら意地があった。こう返してやった。
「だから聞いてるんだろ」
「わかったよ」
お袋はこれで俺の覚悟を見たみたいだった。一呼吸置いてから言った。
「街の病院さ」
「この街のか」
「ああ、そこに担ぎ込まれたってさ」
「わかったよ。じゃあ行って来る」
「ああ、気を着けてね」
「気を着けてなんかいられっかよ」
その時俺の言葉にはもう涙が混じっていた。外に出るともう雨が降っていた。
「チッ」
俺はそれを身体に浴びて舌打ちした。上を見ると顔にかかってきた。
ヘルメットはもうびしょ濡れだった。逆さにしてたせいでもう被れたものじゃなくなっていた。
「こんなのいらねえよ」
俺はこう言ってヘルメットを放り出した。そしてバイクに飛び乗った。雨の中全速力で飛ばした。
手間隙かけて整えたリーゼントが雨でボロボロになった。その時の俺の心みてえに。だけどそれでも構わなかった。その時はそんな

ことを言っている暇じゃなかった。
あっという間だった。気が付いたら病院の前にいた。そして適当に空いている場所を見つけてバイクを置いた。そして病院の中に入った。
「・・・・・・来たか」
入口にもう仲間の一人がいた。俺の姿を認めて声をかけてきた。
「ひでえ姿だな」
雨に濡れ髪も乱れた俺の姿を見てこう声をかけてきた。
「この大雨の中を来たのかよ」
「そっちもな。あいつのことを聞いて来たんだろ？」
「ああ」
仲間は力のない声で返事を返してきた。
「御前も行くかい？」
「その為に来たんだよ、何処だ」
「三階の一番奥の部屋だ」
教えてくれた。
「すぐ行きな。他の奴はそこにいる」
「ああ、わかった」
俺は髪も何も整えることもなく階段を駆け上がった。そしてそのまま言われた部屋に向かった。この時俺は気付いていなかった。俺の顔も髪もただ雨だけで濡れてるんじゃないってことに。

第三章

目が真っ赤だった。けれどその時はそんなことにすら気付く余裕はなかった。

その部屋に来た。部屋の前の席に他の仲間達が集まっていた。皆いた。

「お友達ですか？」

若い看護婦が俺に声をかけてきた。

「ああ、そうだけどよ」

俺はそれに応えた。

「あいつは？」

「残念ですが」

看護婦は目をつぶって首を横に振った。

「ここに担ぎ込まれた時にはもう」

「おい、嘘だろ」

わかっていることだった。けれど俺は叫ばずにはいられなかった。

「あいつが、どうして死ぬんだよ」

「おい、止めとけ」

看護婦の首を掴もうとする俺を仲間達が止めた。

「仕方ないだろ、事故なんだけれど」

「けどよ」

「看護婦さんに言っても無駄だろ、落ち着けよ」

「・・・・・・ああ」

何度か言われてやっと落ち着いた。

「そうだな、すまねえ」

俺は看護婦に謝った。

「いえ、いいですけど。今は」

「わかってるよ。会えないんだな」

「はい。申し訳ありませんが」

「そうだよな、あいつにはもう」
俺は項垂れたまま呟いた。
「何で、何でだよお」
俺は叫んだ。
「これからって時によ、あいつ一人だけ」
言ってもどうにもならなかった。けど言うしかなかった。言わなきゃどうしても納得できなかった。俺は病院の廊下にうずくまった。そして泣いた。本当に心から泣いた。こんな泣き方をしたのは生まれてからはじめてだった。
あいつが逝ってからバンドも自然に皆遠のいた。俺もドラムだけはやっていたがそれも前みたいに燃えるとかそういうことはなくなっちまっていた。けれど続けるだけは続けていた。
「こんなんじゃ駄目だな」
そう思いながらもダラダラと時間だけが過ぎていった。バンドは遂に解散状態になり誰もクラブにも顔を出さなくなった。俺は一人このドラムを使ってくれる奴を探して東京に出た。それで何か掴めるかも知れないと思ったからだ。
最後にこの店のコーヒーを飲んだ。それで街を出た。その時もこうして煙草をふかしていた。
「あの」
ここで店の娘さんが俺に声をかけてきた。
「ん！？どうしたんだい」
俺は思い出から還って彼女に声をかけた。
「いえ、何か色々と考えておられるみたいだったんで」
「ちょっとね」
俺はそれに応えて薄く微笑んだ。
「昔のことを思い出してね」
「そうだったんですか」
「あの頃のことがね、今は懐かしいよ」
声も温かいものに自分で思えた。

「何か本当に遠い思い出だけどね」
何か声が優しくなっていた。
「ずっとここにいたんだよなあ」
俺は煙草を灰皿に置いて呟いた。
「打ち合わせとかはね。よく使わせてもらったよ」
「へえ」
「今はもう皆いないけどね。俺もちょっと戻っただけで」
「またすぐ出て行かれるんですね」
「ああ」
俺は頷いた。
「悪いけれどね。それじゃ」
煙草を消して金を置いた。
「機会があればまた来るから」
「はい」
俺は店を後にした。そしてそのままままたあの橋の下を通った。
見ればあの時の落書きがまだ残っていた。右手にはさっき見た落書きが。そして左手にはあいつが死んだ時に書いたやつだ。赤いスプレーで殴り書きしてある。
「あの時は何もなかったけれどいいものを一杯持っていたな」
俺はまた呟いた。そして呟いた時にまた気付いた。
「今も持っているのかもな」
そう思うと気が少し軽くなった。
あの時と同じ気持ちになってきた。夢があったあの頃に。
「行くか」
ここを去った時とは全然違う気持ちになっていた。当然戻って来た時より。何か全く別の気持ちになっていた。
俺は街を後にした。心をあの頃と同じにして。振り向いたらあの時があった。何もないけれどいいものが山程あったあの時に。

俺達のロカビリーナイト　完

1・12

2006・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8022a/

俺達のロカビリーナイト

2010年10月8日15時53分発行